

## 麻生太郎副総理の 十千発言の意味するものは?!

麻生副総理兼財務相が7月29日、国家基本問題研究所主催のイベントで、「ドイツのワイマール憲法はだれも気づかないうちにナチス憲法に変わっていた。あの手口に学んだらどうか」との発言に対し、8月1日に「真意と異なり、誤解を招いたことは遺憾だ」としつつも、「ナチスを例示したのは不適切ということなので取り下げる」として発言を撤回しました。

この講演会については、7月30日時点で主要各紙が報じていますが、『読売新聞』と『共同通信』が“ナチス発言”を取り上げたものの、『朝日』『産経』両紙は「ナチス」部分について触れていませんでした。

その後、海外メディアの批判的な報道の影響あり、各紙は改めてこの問題を追及し、社説で取り上げていますが、各紙が共通して批判しているのは、言葉の選択と歴史認識についての2点です。

各紙は、ナチスの手口に「学んだらどうか」という、ナチスを肯定的に捉えていると思われかねない言葉の選択について批判しています。『朝日新聞』は、欧米ではナチスを肯定するような発言は、閣僚の進退問題につながると指摘し、麻生氏の発言が、先の戦争に対する日本人の姿勢について、世界に大きな誤解を与えた点を糾弾しています。そして、歴史事実を間違っただけで認識している点についても、麻生氏のいう「ナチス憲法」なるものはなく、ヒトラーは首相就任後、国会の同意なしに法律をつくる権限を政府に認める「全権委任法」を制定したことで、ワイマール憲法を実質的に停止した。加えてその過程では、共産党の弾圧などを行っており、麻生氏が言う「誰も気づかないで」変わったという表現も不適切だとしています。

一方、「完全に悪意のある誤報」とし、「あの時の麻生さんの発言の要旨って、ただのメディア批判なんです。落ち着いて言論しようよって話を言っただけ」とする意見や、日本維新の会・橋下徹共同代表（大阪市長）の「（発言全体としては）憲法という中でね、ナチス・ドイツというものが生まれてきた。民主主義の経緯ってものがあるわけだから、きちんと憲法改正論議、心してやらなければいけないんじゃないか、というところが趣旨だったんじゃないですか。」「だからナチス・ドイツを正当化したなんて趣旨はなかったと思う」との発言があります。

麻生氏の本意は、日本を戦争のできる体制にするとしか考えられません。私たちは、平和憲法を破壊しようとする政治家やマスコミなどには、断固闘っていかねばなりません。

日本もナチス同様、戦争できる体制にしようとするのか？